

日中交流の過去及び現状と展望 2024・8・24 井出亜夫

(はじめに)

今年は、1972年日中国交回復後52年、平和友好条約締結48年が経過します。この間、人の往来、経済交流等の分野において大いなる進展(対中貿易総額は20%を超え第1位)があります。一方、国際関係においては、米国一極体制から、米中二強体制への進行が徐々に進み、米国は対中デカップリング政を展開。しかし、こうした米国も大統領他主要閣僚による中国側カウンターパートとの直接対話をかなりの頻度で続けています。

改革開放による市場経済化の進展と習近平一党支配による中国の政治体制、世界第2の経済大国となった中国との連携を如何進めていくか、長い対中関係の歴史を有するとともに、対華21箇条の要求、満州事変、日中戦争と戦前の誤りを犯したわが国の歴史的レゾン・デートルが問われています。

時の眼(時代の変遷)で見、鳥の眼(世界的視野)で見る政策展開が出来るか考えてみたいものです。

(日本と中国—その交流の歴史と将来展望)

中国の正史に現れる日本は、西暦3世紀、倭国の情勢と邪馬台国女王卑弥呼の存在を記録した「魏志倭人伝」を嚆矢とし、また、『古事記』(712年)には、応神天皇の時代、百済から王仁(ワニ)が渡来して『論語』と『千字文』を献上したことが記載されています

漢字の伝達は、万葉仮名からひらがなへの発展、日本文化への派生を生むが、大陸との往来は、遣隋使派遣603年、遣唐使630年から894年まで、3世紀に及びました。遣唐使派遣における大使以下首脳グループ以外の留学生・留学僧は、今日、日本で実施中の「外国人技能実習生」の「古代日中版」ともいえましよう。

その後、平安以降日本文化の創造、発展も一方にあるものの、喫茶の伝来、禅僧の往来、宋銭の通貨としての使用、寧波を中心とする日明貿易等日中の交流は時を絶ちません。

砺波護(となみまもる)京都大学名誉教授は「日本にとっての中国」の中で、①「朝貢と畏敬の国—邪馬台国と倭国」、②「憧憬と模範の国—飛鳥と平安」、③「先進と親愛の国—鎌倉から江戸」、④「対等と侮蔑の国—明治から昭和前期」、⑤「親愛と嫌悪ない交ぜの国—昭和中期以降」と日本人の中国感を紹介。

「憧憬と模範の国」では、飛鳥、平安における交流において、「小野妹子」が聖徳太子の意を受け、遣隋使として訪中します。また、遣唐使「阿倍仲麻呂」は長年唐に滞在、唐の高官となった後、「あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも」と望郷の念から帰国に向かいます。仲麻呂が帰国途上、遭難死したと思った李白は、「晁卿衡(仲麻呂の中国名)を哭す」と題する五言絶句を創り、両者の友情、日中関係を偲ぶことが出来ます。

「先進と親愛の国」では、宋代景德鎮に代表される陶磁器は、日本に伝来し、中国伝来のものに最も近いものを造ることが出来る陶工が日本の名工と言われました。また、北宋の首都開封の市街を描いた「清明上河図」には、運送屋、両替商、食堂などが描かれ、日本の中国史家は、宋代において中国では近世が実現していたと評しましたが、その影響は遥か下って、洛中洛外図として描かれています。

朱子学は、徳川幕府公認の学として導入。荻生徂徠は、これを批判し、儒教の原点、孔子、孟子に戻ることを主張し、また、伝来した陽明学を学んだ大塩平八郎は、王陽明「知行合一」の思想を実践し、貧民救済の乱を起こしました。

「対等と侮蔑の国—明治-昭和前期」において、明治維新による日本近代化の影響の下、多くの中国人が

自国の近代化を求めて来日しますが、日露戦争後の日本は、朝河貫一博士（イェール大学教授）が「日本の禍機」（1909年）で警告する意味を理解せず、世界史の軌道を外してしまいます。対華21か条（1915年）の要求の後、孫文は「日本は欧米帝国主義の走狗となるのか、アジアの王道を開く先駆者となるのか」と述べ日本を去ったが、わが国は満州事変、日中戦争への道を歩んでしまいました。

松尾芭蕉「奥の細道」には、「松島は扶桑（日本）第一の名所にして、遠く洞庭、西湖に恥じず」と、伝えられる中国の名所に敬意を表しつつ描写していますが、「箱根の山は天下の険 函谷関もものならず、蜀山道も数ならず」と詠う歌詞は明治の驕りの表れともいえましょう。

そうした中でも、東北医学校に留学した魯迅を見守る藤野先生や魯迅文学の出版を支援した内山書店内山完三、孫文の独立運動をサポートした宮崎滔天、梅屋庄吉、犬養毅等多くの日本人の存在は、近代日中交流の歴史に一抹の光を放っています。

（東洋思想と永続企業）

過日、日本を訪れた中国からの企業研修グループは、何故日本には、200年、300年と歴史を有する企業が数千社も存在するのかと私に問い、私は、江戸時代300年に及ぶ平和と「論語と算盤」（殖産興業家渋沢栄一）を紹介し、義と利のバランスを図る東洋思想の所以にあることを説きました。

儒教、老荘思想あるいは仏教思想の中に、永続企業存続の秘訣があるだろうと推察します。特に経済のグローバル化の進展の下、地球環境問題や、拡大する格差社会にどう取組むか、「21世紀の市場経済システムは永続できるか」という問題（世界的ベストセラーとなったトマ・ピケティの書）に私たちは直面しています。論語、孟子、菜根譚等儒仏道の東洋思想には、その解を説く要素が多数存在することを改めて痛感する次第です。

（世界における日中の役割・責任）

第二の経済大国として発展を続ける習近平政権は、アヘン戦争以来の中国近代史の苦悩を振り返り、中華民族の再興を訴え、国民全体が程々豊かになる国（小康社会達成）、三農問題（農村、農民、農業）、先進近代工業の建設、環境問題の解決を進める一方、昔日のシルクロードの現代版ともいうべき「一帯一路」を展開しています。こうした課題で着実に実績を上げ得るか、政権評価に繋がります。

また、かつて物まね大国と言われた中国は、今や特許大国・知財大国として世界に躍り出ている現実も直視し、最近中国政府が発信する人類共同社会の建設もその真意を問わなければいけません。

こうした中国の近現代化のプロセスの中で、わが国としては、①日中関係の長い交流の歴史を想起し、②わが国近代化の成功と失敗の歴史を評価、反省しつつ、また、③今日の市場経済の欠陥を克服する共通の東洋思想で意見交換をしつつ、④日中関係の将来を展望していくことが求められます。そして、それが、日中両国の共存共栄に繋がり、世界史における両国の責任と役割を果たすことにも通じましょう。

（終わりに当って） 以下の東洋思想を紹介しましょう。

①前漢劉向「説苑」（楚の共王出獵して、その弓を遺う。左右これを求めんことを請ふ。共王曰く、「止めよ。楚人弓を遺ふも、楚人これを得ん。又なんぞ求めん」と。仲尼（注：孔子）これを聞いて曰く、「惜しいかな、その大ならざる。また人弓を遺ふも人これを得んと曰はんのみ。何ぞ必ずしも楚のみならんや」と。仲尼は所謂大公なり）。（**国家の概念を超える発想**）

②先憂後楽 岳陽樓記の末尾一節 北宋「汜仲苑」（989～1052）

士当に天下の憂いに先立ちて憂え天下の楽しみの方に楽しむ（指導者の心得を記したもの）

③マハトマ・ガンジジー（インド独立指導者） （現代社会7つの大罪）

・原則なき政治 ・道徳なき商業 ・労働なき富 ・人格なき学識(教育) ・人間性なき科学 ・良心なき快楽 ・献身なき信仰

④宮沢賢治(作家、農民指導者 日蓮宗の影響)(1896年～1933年)(農民芸術概論綱要)

我らは一緒にこれから何を論ずるか・・・

世界全体が幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない

自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する

この方向は古い聖者の踏みまた教えた道ではないか

新たな時代は世界が一の意識となり生物となる方向にある

我らは世界の真の幸福を訪ねよう・・・

(交回復の井戸を掘った人たちの書 石橋湛山 松村謙三 高碕達之助 岡崎嘉平太)

石橋湛山 「和而不同 論語」 松村健三 「独り門前に出て田野を望めば月の明かりで蕎麦の花が雪のようだ」(白楽天村夜の一節) 高碕達之助 「静観」(事の本質を観る) 岡崎嘉平太 「先憂後楽」

(田中角栄国交回復を実現した首相) 漢詩

「國交途絶幾星霜 修好再開秋(とき)將(まさ)に 到らんとす

鄰人眼温かにして吾人を迎へ 北京空晴れて秋氣深し」

